

Hondaの交通安全情報紙



Since 1971



~ Safety for Everyone ~
Hondaはすべての人の
交通安全を願い活動しています。



●編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
〒107-8556 東京都港区南青山2-1-1
TEL 03(5412)1736
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/
●編集人：千葉英雄
※年間購読をご希望の方は、下記までお問い合わせください。
(株)アストクリエイティブ 安全運転普及本部係
TEL 03 (5439) 1191 E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp

SJホームページは

CONTENTS

- 特集①：自転車事故低減に向けた取組み
各年代に応じた自転車教育の充実を……………①
- 特集②：第13回セーフティジャパンインストラクター競技大会
世界トップクラスのインストラクターが安全運転の技術と指導力を競う……………③
- TOPICS①/2012トラフィック・セーフティ・フォーラムin埼玉
②/笹賀地区親子交通安全教室……………④
- NEWS REVIEW①/Honda Cars東京中央「夢のみち2012」出展……………④
- TOPICS③/南関東甲信越地区交通指導員情報交換会/中国・四国地区交通安全指導員合同研修会/北関東・東北エリア交通指導員研修及び情報交換会……………⑤
- STREAM/熊本県での高校生交通安全教育活動 第3回……………⑥
- NEWS REVIEW②/トワイライト・オン キャンペーン
③/第43回全国白バイ安全運転競技大会……………⑥
- 危険予測トレーニング(KYT)/歩行者が歩いている横を通り過ぎる時(四輪車)……………⑦
- 指導者ファイル/笛吹市・専門交通指導員の皆さん……………⑦
- SJクイズ……………⑦
- DOCUMENT EYE ⑧/夜間に横断歩道以外を渡る歩行者を観察する……………⑧

特集①：自転車事故低減に向けた取組み 各年代に応じた自転車教育の充実を



警視庁では東京都内110箇所毎月1回「管下一斉自転車ストップ作戦」を実施している

自転車は子どもから高齢者まで幅広い層に利用されており、最近では東日本大震災による交通の混乱等を機に、通勤手段としても見直されている。しかし、その一方で、自転車関連事故は全交通事故の約2割を占め、自転車利用者の交通ルール違反も社会の注目を集めている。今回は東京都における自転車事故低減に向けた取組みなどを紹介しながら、自転車利用者に対して交通ルール等をどのように周知させていくべきかを探る。

平成23年中の東京都内における交通事故発生件数は5万1477件で、このうち自転車関与事故は1万9209件(自転車相互事故は1件として計上)と、全事故に占める自転車の交通事故の割合(関与率)は37.3%となっている。平成17年以降、自転車の交通事故は発生件数、死者数、負傷者数ともに減少傾向にあるが、自転車の関与率は増加傾向にあり、全国平均(グラフ1参照)を上回っている。さらに、悪質な交通違反者の増加や自転車マナーの悪化も指摘されている。



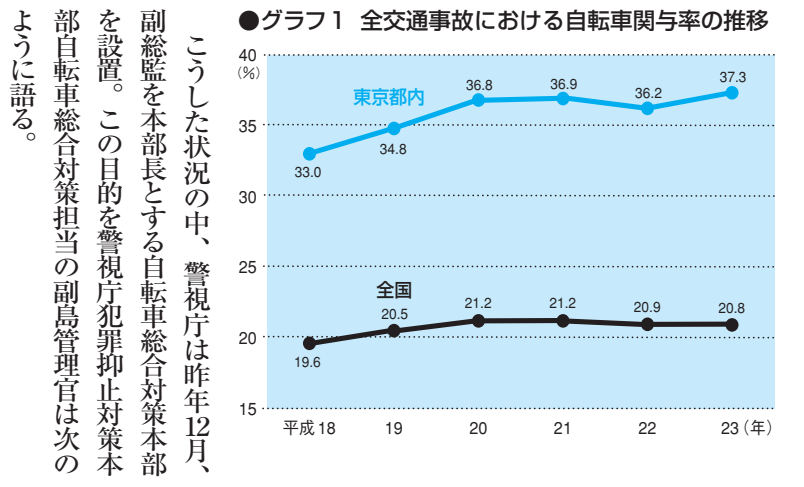
1. 自転車利用者に対する交通ルールの周知と安全教育の推進
2. 自転車利用者に対する指導取締りの強化
3. 自転車通行環境の確立
4. 自転車盗及び自転車利用に係るひったくり被害の被害防止対策



「管下一斉自転車ストップ作戦」などで配布している啓発用のチラシ。自転車事故の賠償例が記載されている

「自転車ストップ作戦」を都内110箇所毎月1回実施

対策を開始するにあたり、警視庁では自転車総合対策要綱を制定し、次の4つの推進重点を定めた。



「あなたが自転車と、思っていますか?」
自転車は免許が不要で、趣味やスポーツでも人気の手軽な車両です。しかし、交通ルールやマナーを無視した走行が原因で交通事故の加害者となった場合には、重い賠償責任が問われることもあります。

「自転車は子どもから高齢者まで、誰もが利用する乗り物です。自転車のマナーが悪いということは、社会における規範意識が乱れつつあるのではないかとという危惧があり、それは多くの方々が感じるところだと思っています。そこで、警視庁が一丸となって自転車総合対策に取り組むことになりました。自転車の交通ルール、安全マナーの浸透を図ることで、都民の皆さんの規範意識を高め、社会的不安を取り除き、より快適で安全な東京の実現をめざすことをねらいとしています。」

こうした状況の中、警視庁は昨年12月、副総監を本部長とする自転車総合対策本部を設置。この目的を警視庁犯罪抑止対策本部自転車総合対策担当の副島管理官は次のように語る。

「自転車は子どもから高齢者まで、誰もが利用する乗り物です。自転車のマナーが悪いということは、社会における規範意識が乱れつつあるのではないかとという危惧があり、それは多くの方々が感じるところだと思っています。そこで、警視庁が一丸となって自転車総合対策に取り組むことになりました。自転車の交通ルール、安全マナーの浸透を図ることで、都民の皆さんの規範意識を高め、社会的不安を取り除き、より快適で安全な東京の実現をめざすことをねらいとしています。」

※1 自転車総合対策推進検討委員会=委員は、轟朝幸・日本大学理工学部社会交通工学科教授(委員長)、樋野公宏・独立行政法人建築研究所主任研究員(筑波大学大学院システム情報工学研究科准教授)、新谷珠恵・一般社団法人東京都小学校PTA協議会会長、高木加津子・世田谷区交通政策担当部交通安全自転車課長、大田雅彦・武蔵野市都市整備部交通対策課長、鈴木直・(株)ゴールドウイン管理本部総務部総務グループ、岩貞るみこ・モータージャーナリスト (注) 役職は当時
※2 提言書は以下の警視庁ホームページよりダウンロードが可能。 http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/kotu/bicycle_plan/bicycle_measures.htm

特集①：自転車事故低減に向けた取組み

提言にあたっては、16歳以上の都民1000人を対象に意識調査を3月から4月にかけて実施。自転車利用者に対する意識調査によると、自転車での右側通行については、「時々ある」「よくある」が43・8%、歩道で歩行者の間をシグザグですり抜ける行動については、「時々ある」「よくある」が30・1%、一時停止標識があるところでの一時不停止は「時々ある」「よくある」が42・6%あった。

「自転車利用者の交通ルールが守られないのはなぜか」という質問に対しては、「ルール・マナーを知らないから」との回答が最も多く、「事故にさえ遭わなければいいから」「急いでいるから」「みんなもしているから」という回答が続いた。

「自転車の交通安全教育を受けたことがあるか」という質問に対しては、「受けたことがない」との回答が54・7%で、年代別にみると10代、20代に比べて、30代以上で「受けたことがない」割合が高くなっている。「受けたことがある」と回答した中でも、受けた時期について、「小学生」との回答が21・3%で最も多く、次いで「中学生」(6・7%)となっている。その一方で、「自転車の交通安全教育を受けたいと思うか」という質問には、「受けたい」「どちらかというを受けたい」との回答が62・1%であった。

交通ルール遵守の気運を社会全体で高める

提言書では、基本的な考え方として、自転車の交通ルールを守らなければいけないという気運を高めるため、高校生以下の若年層にはこれまでの交通安全教育をさらに充実させ、大学生以上の大人には自転車の交通ルールを学ぶ機会を設け、日々生活の中で実践できるように促す必要があるとしている。そして、小・中学生、高校生、大学生、社会人、高齢者など各年代に応じた対策とともに、世代横断的な対策として、インターネットの活用についても触れている。自宅や会社に居ながら、インターネットを使って交通安全教育を受けることができる「eラーニング」システムを開発し、各年齢層において活用できるようにするこ

とを検討すべきであるとしている。警視庁では企業・団体向けに、自転車の運転に必要となる「感情コントロール技能」の修得を目的とした「新・自転車交通安全教育プログラム」を開発し、今年1月より自転車利用者の内面部分に踏み込んだ新たな交通安全教育を開始している。

「学校や企業、家庭、ボランティアグループ等、あらゆる分野の方々には、警察からのアプローチを待つのではなく、自ら積極的に自転車の交通ルールや安全マナーを身につけるといった意識を広げていただきたいと思っています。私どもとしても、そういった社会的気運の高まりとリンクしながら、関係機関との連携、街頭活動、出張講習そしてインターネットを活用した自転車教

四日市市の交通安全教育指導員と、本田技研工業(株)安全運転普及本部鈴鹿普及ブロックのインストラクターによる「あやとり自転車教室」



育、ボランティアの活性化等を整備発展させ、社会のニーズに応えていくつもりです。そうした努力を継続することで、「みんなで学び、みんなで守る」社会が実現できると考えています」と、副島管理官は今後を見据える。



警視庁犯罪抑止対策本部自転車総合対策担当の副島管理官

自転車の基本操作を演技によって習得

自転車の安全利用に対して社会的な関心が高まる以前から、ホンダでは「交通社会に参加する、すべての人の安全をめざして」という考えのもと、自転車教育に力を入れ、教育プログラムを開発してきた。その一つが「あやとりい 自転車教室」。交通ルールへの理解が不十分な幼児・児童に、「走る・曲がる・止まる」の基本操作を演技によって習得してもらうためのものである。ホンダでは全国5カ所の地区普及ブロックを通じて、地域の交通指導員の方々に「あやとりい 自転車教室」を普及している。

8月9日には、三重県四日市市の内部子ども会の小学生約30名を対象にした「あやとりい 自転車教室」が開催された。指導は四日市市の交通安全教育指導員と、本田技研工業(株)安全運転普及本部鈴鹿普及ブロックのインストラクターが担当。ブレーキの練習では、直線を目標とするパイロンま



危険予測能力を高めるシミュレーター教育

で全力で自転車をこいで、そこから両手でブレーキをかけて安全に停止するというトレーニングが行われた。コースの途中には、一時停止場所も設けられており、そこを通過する時は止まって右、左、右、そして右後方の安全を確認してから自転車を発進させるように交通安全教育指導員がアドバイス。「止まる」「観る」ということに重点を置いた指導が繰り返された。



代表者が体験しているシミュレーターの画面は大型のスクリーンに映し出される

ホンダは、こうした演技教育を展開する一方で、自転車利用者の危険予測能力を高めることを目的に、「ホンダ自転車シミュレーター」(以下、シミュレーター)を開発し、普及を図っている。このシミュレーターを導入し、小・中学生や高齢者への自転車教育を推進しているのが、笠岡自動車学校(岡山県笠岡市)だ。同校では、昨年9月よりシミュレーターによる自転車教育を笠岡市および近隣の井原市、浅口市で展開している。小・中学生向けは既に11回(受講者数2200人)開催しており、今年秋からは高齢者向けの教育も開始している。

9月27日、同校検定教習課課長の筒井啓介さんと、講習係の岡伸行さんは岡山県井原市の芳井町生涯学習センターに集まった高齢者(65歳以上)167名を対象に「自転車の安全教室」を実施した。自転車の正しい乗り方や、基本的な交通ルールを筒井



井原市の高齢者167名に自転車の正しい乗り方や交通ルールを伝える笠岡自動車学校検定教習課課長の筒井啓介さん

さんが説明した後、高齢者3名がシミュレーターを体験。シミュレーターの画面を大型のスクリーンに映し出し、他の高齢者に見てもらおう。体験が終わると、3名の運転を再生しながら、岡さんが良かった点や不十分だった点を解説した。

筒井さんは「私たちは地域の交通安全センターとしての社会的役割を果たす上で、自転車教育も重要なものと位置づけ取り組んでいます。シミュレーターは持ち運びが容易なので、出前による安全教室がやりやすくなりました。また、演技教育では難しい様々な危険場面を体験することができ、自分が予測できなかった危険に気づいてもらう上でも有効な教育機器です」と話す。シミュレーターはホンダの四輪販売会社でも導入されるなど、活用が進んでいる(4面参照)。

※3 あやとりい＝Hondaが鈴鹿市と協力して開発した交通安全教育プログラム。4～5歳児対象の「あやとりい ひよこ編」、小学3～4年生対象の「あやとりい」、幼児～小学校高学年対象の「あやとりい 自転車教室」、高齢の歩行者・自転車利用者対象の「あやとりい 長寿編」がある。あやとりいは「あんぜんを やさしく ときあかし りかいて いただく」の略。詳細は以下ホームページを参照。 <http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatorii/>
 ※4 Honda自転車シミュレーター＝自転車を運転する際に起こり得る危険を安全に体験することで危険予測能力を高め、安全意識の向上を図る体験型教育機器。詳細は以下ホームページを参照。 <http://www.honda.co.jp/simulator/bicycle/>

特集②：第13回セーフティジャパンインストラクター競技大会

世界トップクラスのインストラクターが安全運転の技術と指導力を競う

今大会には10カ国から総勢71名のインストラクターが参加



イ、ベトナム、フィリピン、中国、インド、インドネシア、マレーシア、パキスタンの9カ国から29名、総勢71名が参加した。

選手は、グループA（国内交通安全教育センター）、グループB（本田技術工業（株）、本田技術研究所、ホンダエンジニアリング（株）、グループC（海外連結子会社・関連会社・ディストリビューター）に分かれて、安全運転の知識、技量、スキルをはかる競技や審査に取り組んだ。

インストラクターがホンダの安全運転普及活動を伝承

大会1日目は午前8時30分より開会式が行われ、大会運営委員長である千葉英雄・本田技術工業（株）安全運転普及本部事務局長が挨拶。続く「安全運転普及講話」では、千葉事務局長が「安全運転普及活動はホンダの企業文化です。一人ひとりが高い夢や目標、志を持ち、主体的に挑戦する姿であり、そうした心を育む活動でもあります。そして、インストラクターはその伝承者なのです。グループAの皆さんには、日本の安全運転教育を牽引してきた誇りと信念を持ち、指導力の向上をめざしてほしい。グループBの皆さんは、自動車メーカーの一員であることを自覚し、事業所における交通安全意識の啓蒙を図ることが求められています。グループCの皆さんには、ホンダの安全思想を「理解の上、それぞれの国情に応じて活動に取り組んでいただきたい」と、インストラクターへの期待を述べた。

競技は、10時20分より開始。この日は、二輪部門「ブレーキング」「コーススラローム」、四輪部門「フィギア」「ブレーキング回避」が行われた。また、競技だけでなく、安全運転の指導者としての幅広い知識と指導力を確認する「指導力審査」（グループA・B）や「筆記レポート」（グループC）にも取り組んだ。

9月13日、14日の両日、鈴鹿サーキット交通教育センター（三重県鈴鹿市）にて、「第13回セーフティジャパンインストラクター競技大会」が開催された（主催：本田技術工業（株）安全運転普及本部）。この大会は、安全運転普及の各分野で活躍するホンダの安全運転インストラクターの指導力ならびに運転技術の向上と均質化を図る場と機会の提供を通じて、世界に通用するインストラクターの育成を目的に1997年より開催されている。2008年以降の4年ぶりの開催となる今回は、国内から42名、海外はシンガポール、タ

各々のフィールドで大会の経験を活かす

大会2日目は、午前中に、二輪部門「一本橋」、四輪部門「コーススラローム」が行われ、安全運転の技術を競った。午後1時30分

からは、表彰式および閉会式が行われた。グループAの二輪・四輪・総合の3部門で第1位となった下浦紀世人さん（交通安全教育センターレインボー浜名湖）は「スキルなどで、お客様を前に模範走行をする時は絶対にミスできません。この大会は日頃の指導の延長線上にあることを意識して臨んだことが好結果につながりました」と話す。またグループBでは、二輪部門第1位の鈴木龍太さん（本田技術工業（株）埼玉製作所）が「1位をめざして大会に臨んだので、この結果をうれしく思います。大会を通じて学んだことを後輩のインストラクターや従業員に伝えていきたい」、四輪部門第1位の久慈英士さん（本田技術工業（株）鈴鹿製作所）が「大会に向けた練習に取り組むことで、あらためて運転の難しさを再認識しました。そうしたことを若い従業員に理解してもらえようように活動していきたい」と感想を語った。

出場したインストラクターは、今後も各々のフィールドで指導力を磨き、「交通社会に参加するすべての人の安全をめざす」という大きな夢へのチャレンジを続けていくことだ

※フィギアはスムーズな操作・走行かつ正確な車両誘導技術を競う種目。縦7m×横7mのボックス内に設けられた3カ所の枠内に方向転換をしながら指定された前輪または後輪を入れ、タイムを競う

● 1st Safe Driving Global Meeting 安全運転普及活動の意義を各国と共有

「第13回セーフティジャパンインストラクター競技大会」に先立ち、9月12日、「1st Safe Driving Global Meeting」（主催：本田技術工業（株）安全運転普及本部）が鈴鹿サーキットで開催され、日本、シンガポール、タイ、ベトナム、フィリピン、中国、インド、インドネシア、パキスタンの9カ国からHondaの事業所の安全運転普及活動推進責任者20名が参加した。

冒頭では、千葉事務局長が「今回は、Hondaが取り組む安全運転普及活動の意義を各国の皆さんと共有するとともに、海外との関わり合いに対する私たちの考え方について意見交換を行いたいと思っています」と会議の目的を説明。その後、Hondaの安全運転普及活動の基本理念と歩み、タイやベトナムをはじめ各国で行われている安全運転普及活動の現状を発表した。そして、シンガポールをアジア大洋州地域の支援拠点としていくことや、インターネットを活用した情報共有のあり方など、今後の施策の方向性について意見を交換した。



「第13回セーフティジャパンインストラクター競技大会」に先立ち、9月12日、「1st Safe Driving Global Meeting」（主催：本田技術工業（株）安全運転普及本部）が鈴鹿サーキットで開催され、日本、シンガポール、タイ、ベトナム、フィリピン、中国、インド、インドネシア、パキスタンの9カ国からHondaの事業所の安全運転普及活動推進責任者20名が参加した。



グループB 四輪部門 第1位・久慈英士さん

グループB 二輪部門 第1位・鈴木龍太さん

グループA 二輪・四輪・総合部門 第1位・下浦紀世人さん

「指導力審査」ではインストラクター3名1組が、それぞれメインインストラクター・サブインストラクター・受講者役となり、規定の15分間で二輪車や四輪車の運転姿勢についての指導方法を競った（写真はグループA）

TOPICS

1 「ヒューマンエラー対策」



「ヒューマンエラー対策」のセミナーが、8月29日、本田技研工業(株)と和光ビル(埼玉県和光市)で「2012トラフィック・セーフティ・フォーラムin埼玉」が開催された(主催:交通教育センターレインボー埼玉・和光)。

このフォーラムは、交通安全活動に取り組む企業や団体を対象に事故防止の施策などの情報交換を目的に行われており、この日は119団体から259名が参加した。

開会にあたり、永田春記(株)レインボーモーターズスクール代表取締役社長が挨拶。来賓を代表して、吉岡光男・埼玉県警察本部交通部交通部長が挨拶を行った。

今年のテーマは「ヒューマンエラー対策について」。まず、石田敏郎・早稲田大学人間科学学術院人間情報科学科教授が「企業ドライバーのヒューマンエラー防止対策」について講演を行った。石田教授は「ヒューマンエラー」とは、システムが

要請した行為から逸脱した行為であり、安全工学や人間工学では事故原因となる作業員やユーザーの過失を指すものであると説明。そして、無事故運転者と事故多発運転者の認知特性(交通場面の危険度評価およびアイカメラによる計測)に関する実験結果をもとに、事故反復者は、探索的、網羅的情報取得を行っている(危険とは関係ないものまで見ている)ので、事故につながる可能性を持った対象の発見が遅れると指摘した。さらに、安全運転のためには、もう一人の自分を頭の中に置き、その自分が自身の心や行動を絶えず監視して、行動をコントロールする「メタ認知」を行うことが必要であると述べた。

講演終了後は、野村邦丸(株)文化放送編成局制作部専任部長がコーディネーターとなり、パネルディスカッションとなった。パネリストは石田教授と、加藤豊・ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)メディカルカンパニー人事総務本部総務部長。

「仕事のやり方を変えるなど業務中、運転に集中できる環境をつくり出す努力をするべき」という意見が出されるなど、会場の参加者を交えて活発な意見交換が行われた。



Honda セーフティナビ(簡易型四輪ドライビングシミュレーター)や、石田教授が開発した安全運転教育用ソフト「ハザードタッチ」※の体験も参加者の注目を集めていた

※ハザードタッチ=携帯端末上に再生した交通場面の動画を使って、運転中に注意すべき箇所を素早く正しく発見できるように練習するためのソフト



野村邦丸・(株)文化放送編成局制作部専任部長
杉本達彦・埼玉県警察本部交通部交通機動隊長補佐
加藤豊・ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)メディカルカンパニー人事総務本部総務部長
石田敏郎・早稲田大学人間科学学術院人間情報科学科教授

2 親子で体験しながら、交通安全への理解を深めてもらう

9月2日、長野県松本市にあるトピーファスナー工業(株)が主催する「第1回笹賀地区親子交通安全教室」(共催:本田関連企業災害防止協議会信越支部)が開催された。この親子交通安全教室は、子どもには事故の危険や怖さ、保護者には自らが事故を防ぐ知識と、子どもの行動特性を理解していただくことを目的としている。翌週には、同様の教室が日信工業(株)(長野県上田市)でも開催された。トピーファスナー工業(株)での教室には松本市内に住む親子80名が参加した。最初に松本市の交通安全指導員が「あやとりひよこ編」を使って、子どもたちに基本的な交通ルールを説明。その後、屋外で人形を



トラックの内輪差による巻き込み事故の再現



ダミー人形を使った飛び出し事故の再現



運転席から見えない死角を親子で確認してもらう

使った飛び出し事故と巻き込み事故の再現などが行われた。6歳のお子さんと来場した母親は「人形を使った飛び出し事故の再現には驚きました。子どもにも飛び出しの怖さがわかったようです」という。また、9歳のお子さんと参加した父親は「運転席から見えない死角を再確認できたことが良かった。子どもだけでなく、大人にも勉強になる内容でした」と感想を語ってくれた。

トピーファスナー工業(株)取締役製造本部長の越野健さんは「今日は多くの親子に交通安全の大切さを伝えることができました。今後も、他の関連企業と連携しながら活動を継続していきたい」と話す。

NEWS REVIEW

●Honda Cars 東京中央「夢のみち2012」出展 自転車シミュレーター体験会を開催

8月22日、23日の両日、新宿駅西口広場イベントコーナー(東京都新宿区)で開催された「夢のみち2012」(主催:共催:東京都道路整備保全公社・東京都建設局)のイベントに四輪販売会社のHonda Cars 東京中央が出展。Honda 自転車シミュレーターの体験会を行った。

会場には2台の自転車シミュレーターが設置され、イベントの来場者が販売店スタッフのアドバイスを受けながら自転車の安全運転について学んでいた。自転車シミュレーターを体験した人からは「自分が安全確認をしないで自転車で乗っていたことがよくわかった。これからは周囲(後ろ)を確認

してから、発進や右左折をしようと思う。勉強になった」と感想を語った。

同社では3台の自転車シミュレーターを導入し、かねてから都内の販売拠点で自転車の安全運転教室を実施している。同社取締役の安藤敦人法人営業部部長は「安全運転普及活動は販売会社の責務。自転車の事故が増えているなか、私たちができることを模索していました。多くの方に体験していただき、安全意識向上につながれば良いと思います」と話す。

今後、同社では東京都内の各市区町村でのイベントにも積極的に参加し、安全運転教室を開催していく予定だ。



イベントに訪れた幅広い世代の人々が自転車シミュレーターを体験した

TOPICS

3 交通指導員の皆様に情報交換・共有の場を提供し、指導力の向上に役立ててもらおう

Hondaでは、地域で活躍している交通安全指導者の方々に相互の指導方法の確認や意見交換を通じて指導力の向上に役立ててもらおうことを目的に、全国各地で情報交換会や合同研修会を開催している。今回は8月21日に埼玉県、8月23日と24日に香川県および福島県で行われた内容を紹介する。

●南関東甲信越地区交通指導員情報交換会

主催：本田技研工業(株) 安全運転普及本部 埼玉普及ブロック

8月21日、本田技研工業(株)埼玉製作所(埼玉県狭山市)にて「南関東甲信越地区交通指導員情報交換会」が開催された。情報交換会は南関東甲信越6地区の交通指導員が日頃の交通安全教室で実践している内容を演習していくという形で進められた(写真参照)。参加した交通指導員は「自分の力だけでは限界があるので、他地域の事例を学ぶことで指導の幅が広がります」と感想を語った。

情報交換会を視察した埼玉県警察本部交通部交通安全課の鈴木宏良係長は「皆さんの指導実践を拝見して、安全教育の重要性を再確認できました。皆さん自身が楽しんで安全教育を進めており、こうした姿勢が受講者に興味を持ってもらう上で大切だと実感しました」と総評を述べた。最後に、主催した埼玉普及ブ

埼玉県警察本部交通部交通安全課の鈴木宏良係長



情報交換会には埼玉県、東京都、千葉県、山梨県、新潟県から18名が参加



交通指導員同士による意見交換も設けられた



Hondaの交通安全教育プログラム「あやとりひよこ編」を活用して、幼児に歩行者が歩くべき場所をわかりやすく伝える(東京都三鷹市)

ロックの猪俣薫ブロックリーダー「今日は皆さんの交通安全に対する熱い想い、指導力のレベルの高さを感じることができました。今後も皆さんが交流できる場を提供できるようにしていきたいと思えます」と挨拶し、情報交換会は終了した。



「みとこうもん」というキーワードを使って、高齢者に道路の安全な横断や、反射材の着用を啓発(埼玉県狭山市)



おとぎ話「おむすびころりん」をモチーフにして、幼児に飛び出しの危険を伝えるパネルシアター(千葉県多古町)

●中国・四国地区交通安全指導員合同研修会

主催：本田技研工業(株) 安全運転普及本部 浜松普及ブロック・鈴鹿普及ブロック



交通指導員がひよこやパンダの着ぐるみを使って、幼児に道路を横断する際のポイントを伝える(写真上・岡山県倉敷市、写真下・香川県高松市)

8月23日、24日には香川県坂出市にあるホンダセーフティトレーニングセンター四国で「中国・四国地区交通安全指導員合同研修会」が開催され、2日間で16地区が交通安全指導の実演を行った(写真参照)。キャリアの浅い交通指導員からは「教材や指導例をたくさん見ることができて良かった。特に、ベテランの人の話し方は参考になりました」という声が聞かれた。

最後に、主催した鈴鹿普及ブロックの川本正樹ブロックリーダー「今回は多くの方々が集まり、意義深い研修会になったと思います。皆さんの指導内容は、私たちにとても勉強になりました」と挨拶し、合同研修会は幕を閉じた。

情報交換の時間には指導に活用できる簡単な実験のやり方などを交通指導員同士で共有



合同研修会には岡山県、広島県、鳥根県、香川県、徳島県、愛媛県、高知県、長野県から38名が参加



腹話術の人形が途中から人間になるという設定で「交通安全かくニンジャー」のダンスを披露(徳島県阿波市/海部郡)



高齢者に守ってほしいことを高齢者交通安全5則「まみむめも」として啓発(岡山県児島交通安全協会)



研修及び情報交換会には青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県、栃木県、茨城県から32名が参加



高齢者向け安全教室では、冒頭に健康体操を実施。参加者の緊張をほぐしながら、交通安全に興味を持ってもらう(山形県尾花沢市/大石田町)



「あやとりひよこ編」のワークシートを加工し、雪の日の服装や道路歩行をわかりやすく解説(山形県朝日町)



参加者同士で情報交換をする時間も設けられた

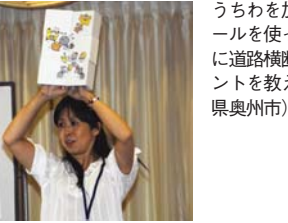
閉会式では金沢一郎・本田技研工業(株)安全運転普及本部教育機器課課長が「既存のツールを地域の実情に合わせて加工し、工夫を凝らした指導に感謝しました。数々の素晴らしい実演に敬意を評します」と総評を述べ、研修及び情報交換会は終了した。

同じく8月23日、24日には福島県福島市のホテル福島グリーンパレスにおいて、「北関東・東北エリア交通指導員研修及び情報交換会」が開催され、2日間で北関東・東北エリア19地区の指導員32名による日頃の交通安全指導の実演と情報交換が行われた(写真参照)。参加した交通指導員は「他の地域の取り組みが分かる貴重な機会。教材の作り方や替え歌など、今回勉強した内容を活動に取り入れたい」と語った。

栃木普及ブロックの小林敏子ブロックリーダーは2日間を振り返り「今回も和やかな雰囲気のおかげで、皆さんと活動ノウハウを共有でき、大変有意義な時間でした。これを機会に指導員の皆さん同士の交流がより活発になればと思います」と述べた。



1つの箱で様々なイラストを表示できる手作りの「からくりボックス」は幼児の注目を集められる(栃木県矢板市)



うちわを加工したツールを使って、幼児に道路横断時のポイントを教える(岩手県奥州市)



STREAM

交通安全教育の潮流

熊本県での高校生交通安全教育活動 連載:第3回 高校生の安全意識を高めるための様々なアプローチ

目的を明確にした 自転車の実技教育

前回に引き続き、ホンダが熊本県内で展開している高校生交通安全教育、そして、高校生による高齢者へ反射材の普及を促進するための取組みを紹介する。

熊本県立多良木高等学校（熊本県多良木町）では生徒の約半数が通学に自転車を利用している。9月10日、1〜3年生296名を対象にした自転車の交通安全教室を実施した。同校では毎年春に1回、指導していたが、今年はホンダと協力して秋にも開催することにしたという。この日の交通安全教室は学年ごとに約1時間ずつ行われ、生徒全員が自転車に乗って、運転する際に起こりうる危険を安全に体験した。

まず1つ目は急制動。全力で自転車をこぎ、目標となるパイロンを通過したら両手でブレーキをかけて止まる。危険を発見しても、自転車はすぐには止まれないことを理解してもらう。2つ目は、片

多良木高校では生徒全員が自転車に乗って課題に取り組んだ



ドライバーからは見えない死角についてインストラクターが説明

1回目は両手で運転。2回目は片手運転で、パイロンを避けるのがいかに難しいかを体験

班長の高津史乃さん（2年生）は、「ドライバーが遠くからでも反射した光が認識できることを念頭にデザインしました。また、クルマのライトはロービームの状態が多いということか

このような熊本県内の高校での交通安全教育を展開している熊本普及ブロックは、熊本市立必由館高等学校（熊本県熊本市）と協働で新たな取組みを行った。高齢者への反射材の普及を促進するために、服飾デザインコースを持つ同校に

反射材を利用した衣服を高校生自らが製作

手運転の危険性。最初は両手で、その後片手運転でも走行して、片手ではバランスが取りにくくなって危険であることを実感してもらう。本田技研工業（株）安全運転普及本部熊本普及ブロックのインストラクターと、同校の先生方は生徒を観察しながらアドバイスを行った。最後に、クルマの死角（3年生はクルマの内輪差）について。実際のクルマを使って死角の範囲を示し、ドライバーから自転車はどう見えているのかを伝えた。同校生徒指導主事の甲斐郁文教諭は「ホンダのプログラムは、単に自転車に乗って練習するのではなく、生徒に何を理解してもらおうかが明確になっており、それに対応した実技が組み合わされている点が良いかと思えます。様々な体験を通じて、ブレーキ操作が不十分であるなど、自転車を乗りこなせていない生徒が少なくないことが把握でき、私も今後の指導への参考になりました」と話す。

生徒に社会とつながることを意識してもらう

デザインと製作において中心となったニューウェーブ研究班では様々な実験により、反射材は硬く、すべりやすいため、反射材同士では縫いにくいことなどを確かめた。その結果、綿などの天然素材に反射材をデザインとして縫い付けたスカートやズボンを製作することにした。



西村奏美さん（前列左から2番目）、高津史乃さん（前列左から3番目）と、ニューウェーブ研究班の皆さん

反射材を活用して高齢者が着用しやすい衣服の製作を今年3月に依頼したのである。同校服飾デザインコース主任の荒木雅子教諭は「生徒たちが交通安全という視点を学ぶことで、自分のやっていることが社会の中でどう役立つのか体験することができると考え、依頼をお受けしました」と振り返る。衣服の製作を担当したのは、同コースの服飾デザイン部である。熊本普及ブロックでは反射材（繊維素材）を提供するとともに、熊本県内の交通事故の状況などを生徒たちに伝えた。服飾デザイン部部長の西村奏美さん（3年生）は「私たちが学んでいるファッションの知識や技術を高齢者の交通事故防止に活かしたいと考え、取り組みました。反射材は、これまで扱ったことがない素材です。そこで、素材の特性を知るところから始めました」と話す。

ら、スカートやズボンの裾の近くにも反射材を縫い付けるという工夫もしています。こうした衣服が普及して、高齢者の方を交通事故から守られればうれしい」と語る。

こうして半年をかけた、反射材を利用した衣服が完成。9月29日、同校文化祭のファッションショーで作品として発表した。高齢者向けのモデルは同校の卒業生が務めた。実際に作品を着用した卒業生は「反射材のタスキをもらいますが、やはり身に付けるのは抵抗があります。衣服にデザインとして組み込んであるものなら、私たちが着用しやすい」と評価する。

「生徒はともすると、学力だけで何事も解決すると思いがちですが、勉強して得た力を様々な形で表現し、社会とつながらないう意味がありません。今回の経験を通して、それを実感できたと思います」と、荒木教諭はファッションショーを終えた生徒たちを迎えた。

文化祭のファッションショーで発表された作品（一部）



ファッションショーでは「おしゃれに身を守ろう作戦」というテーマで、取組みの主旨を全校生徒や一般の来場者にプレゼンテーションした

NEWS REVIEW

2 ●トワイライト・オン キャンペーン 暗くなったら、見られるためのライトオン!



一般社団法人日本自動車工業会（以下、自工会）は今年度、茨城県内における交通事故死者数低減のため、会員各社および関連団体等と連携をとりながら、交通安全教育やキャンペーンを展開。その一環として、IBS茨城放送とともに、秋から年末にかけて増加する歩行中の高齢者の死亡事故を減らすため、ドライバーに夕方早めのヘッドライト点灯を呼びかける「トワイライト・オンキャンペーン」を実施している。

は、茨城県交通安全協会が主催する「茨城路セーフティロードの日」街頭キャンペーンに自工会も協力。当日は水戸市の吉沢交差点前で、「トワイライト・オン」を呼びかけるのぼり旗を掲示し、茨城県交通安全協会の職員らが信号待ちをしているクルマのドライバーにキャンペーンのステッカーや反射材付バッグなどの啓発品を配布した。

茨城県交通安全協会の生田目専務理事は「夕方早めのヘッドライト点灯を浸透させることが、交通事故防止につながると考えています。今回は自工会の皆さんにも協力していただいたので、より多くのドライバーへの啓発ができました」と活動の成果を語った。

「トワイライト・オンキャンペーン」は、年末まで茨城県内各地の街頭やイベントなどで啓発活動が行われる予定だ。



3 ●第43回全国白バイ安全運転競技大会 全国の白バイ隊員が高度な安全運転技術を競う



10月6日、7日の両日、自動車安全運転センター安全運転中央研修所（茨城県ひたちなか市）にて第43回全国白バイ安全運転競技大会（主催：警察庁）が開催された。

この大会は、全国の白バイ隊員の安全運転技能の向上、士気の高揚及び隊員相互の融和団結を図ることを目的として、昭和44年より実施されている。今年は、46都道府県警察及び皇宮警察から、女性隊員38名を含む183名の選手が参加し、バランス走行操縦競技、トライアル走行操縦競技、不整地

走行操縦（モトクロス）競技、傾斜走行操縦（スラローム）競技の計4種目によって熱戦が繰り広げられた。

主な結果は以下の通り。

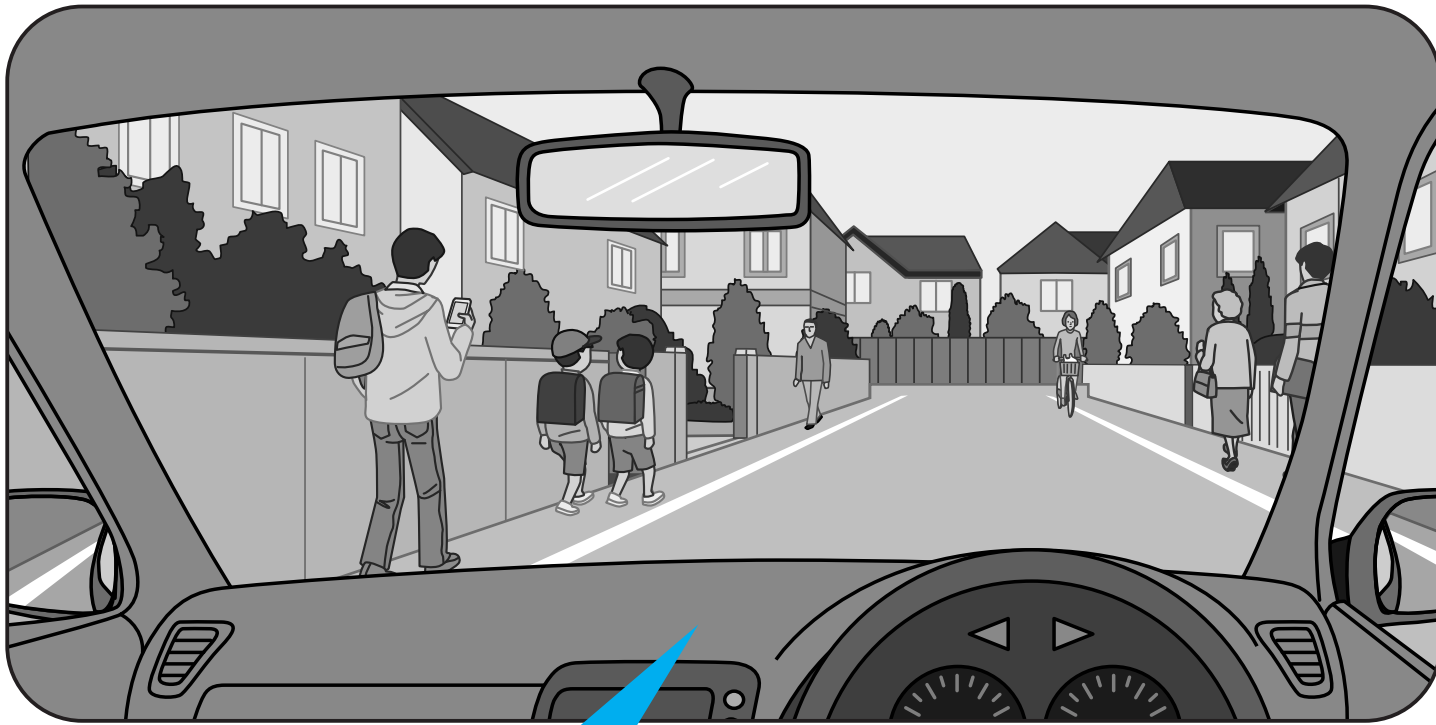
- 団体競技の部
 - （第1部・9都府県警察）優勝/警視庁、第2位/埼玉県、第3位/愛知県
 - （第2部・37道府県警察等）優勝/三重県、第2位/熊本県、第3位/広島県
- 個人競技の部
 - （男性の部）優勝/玉井伸政（神奈川県）
 - （女性の部）優勝/高橋幸江（警視庁）



危険予測トレーニング(KYT) — 危険感受性を育てる

第29回 歩行者が歩いている横を通り過ぎる時(四輪車)

交通事故を防止するためには、路上で出会うさまざまな危険を予測することが大切です。このコーナーでは危険感受性を高めるための題材を提供します。今回は四輪車のドライバーに、歩行者が歩いている横を通り過ぎる時の危険について考えてもらうためのKYTです。



活用方法

- ① 少人数のグループをつくります。
- ② 「交通場面のイラスト」を見せながら、意見を出し合います。
- ③ その後、「解答・解説※」を参考にして、どんなことに気をつけて運転すれば良いか再び話し合ってください。

※「解答・解説」と「交通場面のイラスト(カラー・A4版)」は下記SJホームページでご覧いただけます。またPDFファイルもダウンロード(無料)できます。

ホンダ SJ

検索

【使用上の注意】

- 営利目的での利用はおやめください。
- 内容の無断転載、無断改変、一部抜粋しての利用はおやめください。
- その他、使用に関するご質問はお問い合わせください。

本田技研工業(株) 安全運転普及本部
TEL: 03 (5412) 1736
E-mail: sj-mail@spirit.honda.co.jp

あなたは、人通りのある狭い道路を走っています。道路の両端に歩行者や自転車がいる横を通り過ぎようとしています。

安全に通過するには、どのようなことを予測する必要がありますか？

©本田技研工業(株)

指導者ファイル 10

このコーナーでは、地域で活躍する交通安全教育に携わる指導者の方々を紹介していきます。



笛吹市・専門交通指導員の皆さん
写真左から、岩間ともみさん、渡辺真由美さん、福庭昌子さん

幼稚園・保育所では毎月テーマを決めて指導

笛吹市は山梨県のほぼ中央部に位置し、石和温泉などの観光地を有する都市だ。その笛吹市では、幼児や小・中学生、高齢者を中心に平成23年度は380回の交通安全教室を開催した。同市の石和地区で、交通安全活動を担っているのが今回紹介する専門交通指導員の3名である。

同市内の幼稚園・保育所では月ごとに、「道路の安全な横断」「道路標識を覚えよう」「交通安全散歩」など課題を設定し、子どもたちへの交通安全指導を年間12回行っている。「交通安全に遭ったらいけない」という意識を持ってもらうことを基本に取り組んでいます」と岩間さんは子どもへの指導のポイントをあげる。渡辺さんは「クイズ形式を取り入れるなど、子どもたちも参加できるような工夫をしています」、福庭さんは「交通ルールを守ることは自分の命を守るためであることを理解してもらうことを心がけています」と話す。

毎月、幼稚園・保育所を訪問するので、自分たちが来たら「楽しいことがある」と子どもたちに期待してもらうことが大切だと、専門交通指導員の皆さんは感じている。「そのため、自

分ちの手づくりの教材とともに、Hondaの「あやとりい」や「交通安全かるた」を積極的に活用しています」と岩間さんはいふ。

指導者の皆さんの活動を動画でご紹介

<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/area/movie/>

★幼児に信号機の色を伝える教材



「あやとりい ひよこ編」のワークシートと、紙人形を使って、「びかくんめをまわす」(松居直・作、長新太・絵、福音館書店刊)という信号機を主人公にした絵本の物語を専門交通指導員の皆さんが立体的に表現。読み聞かせをしながら、交通安全の基本を伝えることができるという

★標識の色を当てるクイズ



モノクロの標識を見せて、実際の色は「あか」「あお」「きいろ」のどれかを答えてもらうクイズ。標識に興味を持ってもらうことが目的で、子どもにわかるように標識の意味も説明。また、指導員が見せる標識の色に合わせて、決められたポーズをとってもらうというゲームも行っている

★足跡から動物を当てるクイズ

横断歩道の前に、いろいろな動物の足跡を置いて、子どもたちに動物の名前を答えてもらう。横断歩道を渡る前に、必ず止まることの意識づけを目的としている。これも「あやとりい」の中にあるワークシートからヒントを得てつくったという



SJクイズ ?

Q1 平成22年の歩行者死亡事故(歩行者が第1当事者または第2当事者の事故)の相手は9割以上が自動車ですが、自動車の事故時の行動類型で最も多いのは、次のうちどれでしょう？

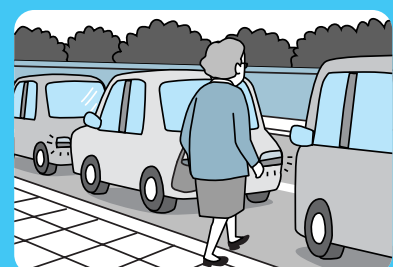
- ①直進 ②右折 ③左折 ④後退

Q2 歩行者死亡事故を自動車行動類型別に運転者の人的要因をみると、「直進」で最も多いのは「漫然運転」と「脇見運転」です。この「漫然運転」と「脇見運転」で何%を占めているでしょう？

- ①約50% ②約60%
③約70% ④約80%

Q3 自動車直進中の歩行者死亡事故を歩行者の法令違反別にみると、「違反あり」が約70%を占めています。違反の中で最も多いのは、次のうちどれでしょう？

- ①車両の直前・直後の横断
②横断歩道外横断
③信号無視

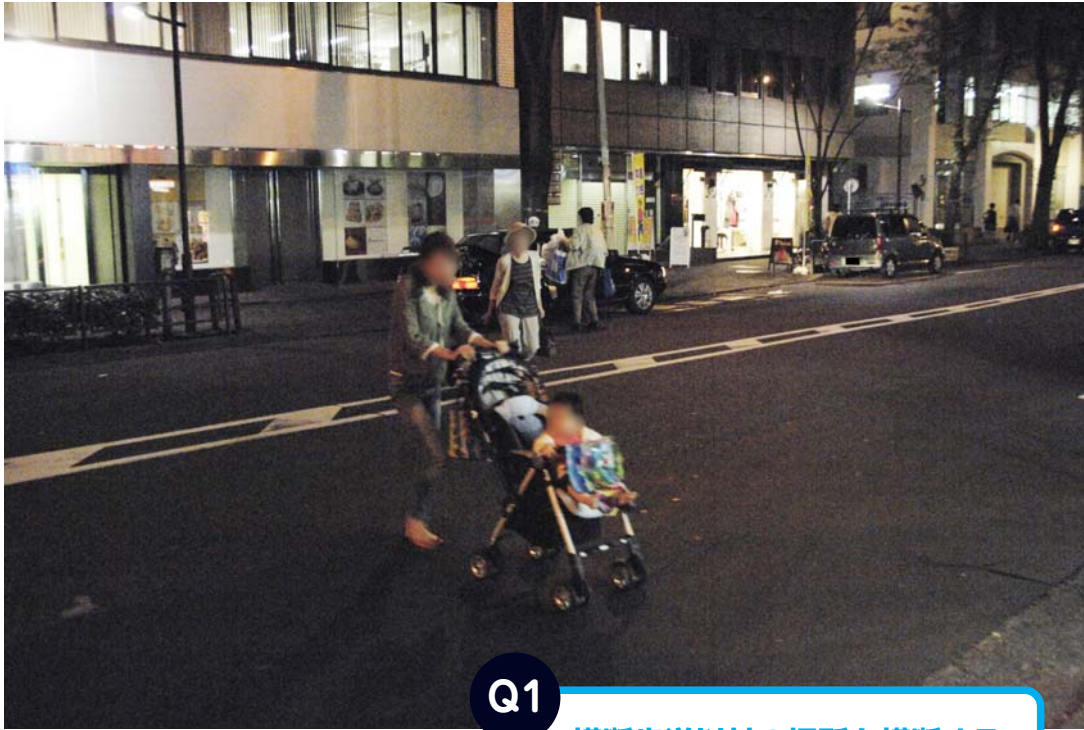


※「解答」は8面下。「解説」は下記SJホームページでご覧いただけます。<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/sj/>

©本田技研工業(株)



夜間、横断禁止の道路を歩行者は渡っているか？



ベビーカーを押しながら横断。高齢者は重たそうな荷物を持って横断をしている

A1 実際の観察から

★Q1の回答
114人中、105人(92.1%)が成人



ゆっくり斜め横断する女性たち

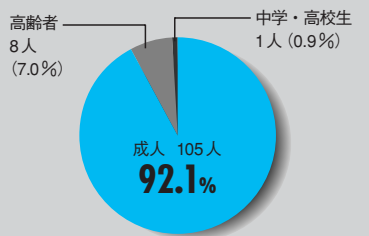
観察中に横断歩道以外の場所で横断した歩行者は合計114人。そのうち成人(19歳～64歳)が9割以上を占めた。幼児、中学・高校生で横断したのは1名のみ。自転車の横断についても、9割が成人と高齢者だった。交通ルールを守っていないのは、幼児や中学・高校生に範をみせるべき大人の年代だった。

実際の観察では、目の前の店舗に行くために目の前の道をすぐ横断してしまったり、運送会社のドライバーが車両を路上駐車して横断歩道を迂回せず届け先に向かったりする姿が見られた。

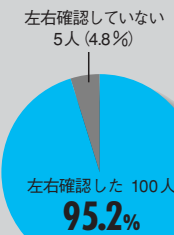


配達物を抱えて道路を斜め横断

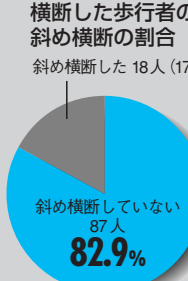
●横断歩道以外の場所を横断した人の年代



●横断歩道以外で道路を横断した歩行者の左右確認実施の割合



●横断歩道以外で道路を横断した歩行者の斜め横断の割合



反対車線を逆走してから道路を横断する自転車

観察を開始したのは帰宅ラッシュが始まる時間帯。歩行者と自転車の流れは青梅街道から駅に向かっていった。青梅街道から駅までの距離は約500m、見通しのよい直線道路だ。駅までの道のりには信号が設置された横断歩道が4カ所あった。歩行者は駅に向かいながら、信号で車両の往来がないタイミングで車道を横断していた。走行する車両が多い場合は、車両が通過するまで待つてから横断していた。横断歩道以外の場所で横断する自転車のほとんどは、あらかじめ車道に移動し、後方確認をしてから横断していた。また、車道を一時的に逆走しながら対向車線に移動する自転車も見受けられた。

一方、車両側は歩行者が横断歩道以外の場所から横断しようとしても、スピードを緩める様子は見られなかった。高齢者が道の真ん中で立ち往生をしていたが、車両は躊躇なく通過していた。



車両が接近していてもゆっくり歩く歩行者

Q2 「左右確認をしない」「斜め横断をした」歩行者はどれくらいいたでしょう？

Advice

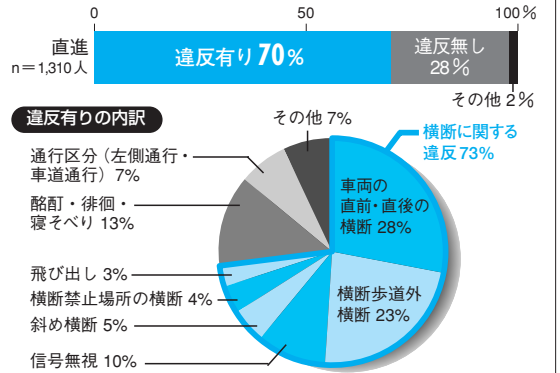
夜間は目立つ色の服装と反射材を着用し指定の場所で横断を！

薄暮時から夜間は、運転者から歩行者の存在が認識しづらい時間帯である。しかし、反射材(反射材付のズボン)を着用していた歩行者は、観察した114人中1人にとどまった。通行車両も、歩行者の死亡事故低減につながる薄暮時のライトオンする車両は見当たらず、日没後にライトを点灯させる場合が大半だった。

観察場所には「横断禁止」の標識が設置されていたが、歩行者は堂々と道路を横断していた。横断歩道など指定場所以外の道路の横断は、事故発生の可能性が高く、危険なのでやめるべきだ。夜間、歩行者や自転車は車両から存在を見落とされやすいため白や黄色の目立つ色の服装、反射材を身につけることが事故防止につながる。

また、運転者は歩行者や自転車の急な飛び出しを予測し、速度を落としたり、安全確認をしつかり行いながら注意して運転するとともに、早めのライトオンを心がける必要がある。

●自動車直進時における歩行者法令違反の有無別の歩行者死者数の割合(平成22年)



※出典：公益財団法人 交通事故総合分析センター「イタルダ・インフォメーション」No.94

A2

★Q2の回答

●横断歩道以外で道路を横断した歩行者・自転車

	歩行者		小計	自転車		小計
	男	女		男	女	
子ども	0	0	0	0	0	0
中学・高校生	1	0	1	1	0	1
成人	65	40	105	11	6	17
高齢者	5	3	8	5	0	5
小計	71	43	114	17	6	23

※子ども(小学生以下)、中学・高校生、成人(19～64歳)、高齢者(65歳以上)の判断は観察者の見解による